

生き物の飼育経験と苦手意識調査 要因と園での飼育希望の影響について

学籍番号 1933022 氏名 小山信志 村上涼ゼミ

苦手意識による嫌悪感を行動等に示す大人の姿は子どもに何かしらの影響を与えるのではないかと疑問を感じたことがきっかけである。大人の苦手意識から自然と関わる機会が減ることや、嫌悪感などをから飼育経験の機会が減ることに繋がってしまう可能性を考慮すると、結果的に自然や生き物に親しみを持つ機会が狭まる事にも繋がると考え調査を行った。

先行研究として、日高(2004)虫嫌いの構造仮説として、大人になるほど関心が薄れ、室内に現れる虫に嫌悪感を示す仮説を述べている。深野(2022)は進化心理学から研究を行い、感染症を回避する行動と過度に警戒する事を示した。立原(2022)は虫の苦手意識と関心が移行する時期について研究し、移行時期は「児童期」であるとした。

生き物への苦手意識と飼育経験、飼育希望、感情と関わりにおける願いのアンケート調査を行った結果、飼育経験がある人は触れることに抵抗感が少ない事が示された。しかし、飼育経験が無い人と苦手経験が比例せず、愛好的・嫌悪的な感情や、文化等による要因が考えられた。飼育経験が無い場合、日常生活の中でポジティブ・ネガティブな体験の影響を受けやすい可能性が示唆された。

飼育時の好意的な体験として挙げられたのは、生き物と暮らす日々の出来事や、日々の成長や生まれ死ぬまで関わっていた当時の思い出などが記述された。また、親しみを持てたエピソードとして、自然のある野山などに出かけて生き物と触れ合った事や、幼虫を育てる体験。生き物との触れ合いや友人と共に触れ合った体験。実習での子どもと生き物と関わった事が回答された。

苦手意識は室内や自身に近づく生き物、トラウマの体験についての記述が見られた。また、苦手意識に関して視覚情報に言及する回答が多く、記憶・体験・先入観・本能などと結びついていることが示唆された。

好きな生き物は、ペットショップなどで見られる生き物の名前が挙がる傾向があり、苦手な生き物は、不快害虫を始め人の生活の中に侵入する生き物が回答されていた。

本研究では、具体的な出来事の要因として結果を得たが、好意的・嫌悪的な印象を持たれやすい生き物があり、その結果が先天的か後天的か、それらの要因の解明には至らず、より詳細な分析が必要である。

関わる事への願いにおいて生き物の好き嫌いはあるが、伝えたい物事や意志、行いたい体験や経験などがあり、命の大切さや知識に関する願いや思いは各々の学生や保育者の多くが持っていた。

飼育経験はその理解の一步として、生き物の生活全般に関わり、どのように生きて死んでいくのかを知る事ができる。(保育内容 環境)それを伝える大人の苦手意識の改善は活動への抵抗感を減らし飼育活動などを行いやすくすると言える